

【書 評】

イヌの動物学 第2版

浅川 満彦

(酪農学園大学獣医学群獣医学類)

言うまでも無く、臨床獣医学の碩学で、最近まで北海道獣医師会でご活躍頂いた猪熊 壽 東京大学教授による一般書であるので、皆さんにはご関心があろう。

本書は5章から構成され、第1章は犬属全般の分類・進化および日本犬を含む品種形成と再野生化などの解説からなり、特に、品種解説では猪熊教授ご自身による見事な各犬種の描画も添えられ、丁寧に執筆されている。この章では犬とその祖先・近縁な野生動物の精緻な動物学的情報に留まらず、家畜化の歴史や文化との関連性が丁寧に解説されているので、少々手強い飼い主さんとのやり取りする際の理論武装に丁度良い。なお、分子進化に基づく犬の起源やオオカミとの関連性などに関しては、第2版で執筆に加わった遠藤秀紀教授が、本書末尾・補章で最新情報を追記されているので、理論武装は完璧である。第2章は狩猟行動で必須となる視覚や消化生理を中心に扱っている。本書初版は2001年に東京大学出版会「アニマルサイエンス」シリーズの一角として刊行された。このシリーズには、今回の犬以外に、ニワトリ、馬、豚および牛がある。「アニマルサイエンス」、すなわち「人類と動物の関係について考える科学」の看板シリーズで、猫が扱われていないことに「おやっ？」とされるかもしれない。しかし、この章で、犬との対比で猫も随所に登場するので、安心して欲しい。また、完全な肉食性である猫にはない犬の糖代謝能力獲得（なので、本書では犬は雑食性＝スカベンジャーと見なされている）の分子論については、補章（前述）で追記されている。また、第3章は学習や繁殖生理全般の記述であり、特に、過剰な攻撃性や問題行動や食糞などの異常行動などと向き合う実務で、ヒント満載となろう。国試後に遠ざかっていた基礎獣医学の知見をブラッシュ・アップする意味でも、しっかり、読み込もう。重要事項なので、問題行動については、治療・予防を含め第4章でさらに掘り下げられる。たとえば、攻撃行動として捕食・支配、防衛、高音への突発性狂暴症候群と分けて詳述され、こういった教育をまったく受けていなかった私（1970年代後半から80年代初頭にかけて獣医大に在籍）には大変助かった。皆さ



んにとっても、論点整理面で有益ではなかろうか。加えて、この章にはヒトに共通する感染症も紹介されていた。もちろん、重要な情報が厳選され参考になる。しかし、重箱の隅をつつくようで恐縮だが、146頁の「疥癬（学名）は、・・・ダニの一種である」は不適切である。疥癬はヒゼンダニによる疾病を指すからだ。また、本書は北海道以外の読者の方が断然多いのだから、多包条虫の記載では（144頁）、本州の一部地域にも定着したことは、必ず付記しておくべきであった。次回改訂版に期待したい。第5章は今後の展望となる問題点の指摘である。外見上の品種基準をクリアするための断尾・断耳、心臓病や股関節形成異常など品種特異的疾患、高齢化・成人病・痴呆など、いずれも、今後の獣医学教育でも重要な指摘である。獣医大はコアカリ教育や国際化などで汲々としているが、すぐそこにある問題を無視して良い理由とはならない。また、「処分されるイヌ」で指弾されたシベリアンハスキーの一過的な流行とその後の悲劇的な末路は、本道を舞台にした関連漫画と密接に関わっていたことを知り、複雑な思いになった。この漫画により、獣医大ブームが起き、獣医大教員は嬉しい悲鳴を上げていた。学生には、自分の不明とともに、必ず伝えたい。

猪熊 壽・遠藤秀紀 著、240ページ、A5判

2019年11月 第2版発行

定価3800円+税、東京大学出版会、東京

ISBN：978-4-13-074023-4